平成 29 年度 第１回 ゼニガタアザラシ科学委員会
議事概要

議事 1．モニタリング方法の検討について

○事務局より、資料１－１、１－２、１－３に基づき説明。ゼニガタアザラシの生息頭数の把握等に係るモニタリング方法について、科学委員会の下部に、作業部会を設けて集中的に議論することを提案した。

○主な意見等

【ドローンを用いた生息個体数の把握について】

・ドローンによる撮影画像を用いた上陸数データは，陸上目視観測で生じる見落としが無く，これまでの陸上からの目視カウントの較正にも利用できる．高頻度で実施してほしい。

【遺伝子を用いた生息個体数の推定について】

・①遺伝的多様性の変化による個体数の推移把握と②遺伝子を用いたマークリキャプチャーによる個体数推定の提案がなされたが，これらは異なる目的によるものか？
→アプローチのしかたが異なる。①は個体数変動の傾向を把握するものであり、②は個体数推定の手法として従来の手法（目視）に加えて新たに提案したもの。個体数を推定する際には、複数のアプローチを取ることが望ましい。

・②では個体数の推定を行えるだけでなく、DNA カタログを作成することで自然死亡率なども副次的に得られる可能性があり、情報を有効に活用できる。

・　遺伝子分析による個体数把握は捕獲個体から遺伝子を抽出し全体の個体数を推測するので、結果に偏りが生まれる可能性がある。

・DNA 解析はすぐに始められるか？
→過去に捕獲された個体のサンプルがあるので可能。ただし、野生下の生体からのサンプリングが課題。

・DNA 解析よりも、捕獲個体に発信器やタグを装着して放獣し、マークリサイトにより個体数を推定する方が省力化できるのではないか？

・ヒグマは他に手法が無いのでヘアトラップを用いた DNA 解析により個体数推定を行っている。ゼニガタアザラシは上陸数のカウントができるという好条件があるので、このカウント調査で分からない内容を DNA 解析で調べるという視点が重要。

・データ比較のため、現在のモニタリング体制は継続させなければいけない。

【作業部会の設置・科学委員会設置要領の改正について】

・今回の科学委員会で議題となっているモニタリング手法等についても、各論や方法

論については、作業部会で議論するのがよいだろう。

作業部会の設置及び要項改正について、全会一致にて案のとおり承認された。

議事 2．繁殖期の上陸個体数等について

○事務局より、資料２に基づき繁殖期の上陸個体数が大幅に減少している状況ではない旨説明。また、パワーポイントや水中カメラの映像等を用いて、今期のこれまでの防除対策・個体群管理の状況について速報として報告。

○主な意見等

【上陸個体数の現状について】

・直近の最大上陸個体数の推移についてはどう評価するか？

→カウント数は少なくなっているが、実際に個体数が減っているかは不明。ただし、大幅に増えた印象はない。

資源動態推測やシミュレーションではこれらも考慮される。

・Pup の最大数が重要。最大数をカウントする時期までは刺し網を実施しないなどの調整が必要ではないか。Pup の最大数をカウントする時期はいつ頃か。

→あくまで感覚的なものだが、例年 5 月 15 日から 20 日ごろに Pup 数は最大になると思う。

・「上陸頭数から個体数を推定する方法」は確立されたといえるのか？（環境省）

→まだ手法について検討の余地が大きい。また、毎年推定個体数を出すことができていないことも課題。せめて、3 年ごとなど定期的に行う必要がある。

→自然科学の分野で確立されたと言える手法はまれ。常に改善が必要。

・過去と比較するためには、一貫した方法でのモニタリングが重要。

【今後のセンサス方法について】

・新たな手法の議論より先に、捕獲した結果として観測数が減るかどうかを一貫したモニタリングで把握することが重要。

・作業部会での議論が必要。

→科学委員会での議論のために、個体群動態の評価についての共通認識が必要。

・これまでと同様の目視カウントは必要。個体数推定のために、精度を上げるなど対応が必要。

【平成 29 年度の取組について】

・メスに偏った原因についてはどう考察するか？

→現在は幼獣の子離れの時期であることから、成獣メスの個体の活動が活発化して

いることも一因と推定される。（環境省）

・定置網内部に、メスが捕獲されたときに子供が来ていることはあるか？

→水中映像では親子が観察されている。（環境省）

昨年の水中映像でも複数頭の来遊が観察されている。

【個体群の推定方法・捕獲数について】

・140 頭の捕獲上限については、真の性別・齢別構成からランダムに捕獲するという前提で計算した値。

・もし、捕獲上限数の 140 頭について見直す場合は、タイムラインを策定してほしい。

・成獣 1 頭に対して子供何頭を対等に扱うか、考える必要がある。

・幼獣に偏っているのは問題である。刺し網より定置網を重視すべき。

【今後の進め方について】

・捕獲個体の偏りについて問題があれば、科学委員会を開催して方針を決めたい。（環境省）

・捕獲上限数をどうすべきかは、まずは作業部会で議論してほしい。

・操業中の定置網を使うことによる地域負担にも限界がある。捕獲専用の定置網を検討いただきたい。

・秋の成獣及び亜成獣の捕獲頭数が今後の捕獲方法を考える上で、重要な判断材料になると思われる。また、秋定置網での捕獲に向けては、漁獲への影響軽減策等も検討が必要。

以上